

に脳中を搅拌せり。かゝる事になるべしと知りたらましかば、畢生の勇氣を振ひても吾意を彼に告ぐべかりしものを、今は及ぶべくもなし。此上の失望はあるまじきに、尙念ひ断つ事の難きぞ是非もなき。

父君と母君とは早く嫁を娶りて初孫の顔見たしと、來る人毎に誰や好き彼や適當しきと嫁の話しのみし給へど、吾は一生獨身にて過ぎんとは固より思はず、又彼が猶何處にも嫁がであるべしとも考へねど、今餘人を娶らんとは如何にしても決心しかね、思ふ旨ありとて未だ縁談を承諾せず。父母の君はいたく心配して吾友人にまで頼みて吾を納得させんと力め給ふ。吾もかくまでの心を苦めま办する事の空恐ろしくて、如何にも御両親のみ心に任せま办らせん、唯其前に父君も御疾やゝ怠り給へば二週日の暇を得て、明石に海水浴に參りたしといへば、そは易き事なりとて直に許し給ひぬ。

「一人の友人と共に明石が浦なる集望閣といへる旅亭に就き、心に残れる未練を洗ひ去らんと試みたり。正

午頃着きて暫し休らひ、海上を眺望して談笑し、衣服を脱して浴みし、日も暮れれば散歩少時にして、少し早けれど八時といふに枕に就きぬ。友人は忽ち鼾聲雷の如くなれど、吾はあやにくに種々様々の忘想湧起して眼を閉づれど心は亂れ、眠るべうもなかりしが、流石に晝の疲勞や出けん、十時頃睡りたりと見え、下婢の呼ぶ聲に驚きさむれば、下婢「海野様とは貴方様ではござりませぬか」といふ。「如何にも吾なり」と答ふれば「只今貴方にお目に懸りたしとて美しいお女中が」と笑ふ。「ハテ吾は其様な人に訪はるゝ筈なし」といへば「だつて海野様は外にはなし」といはれて、訝りながら逢ひぬ。

逢うて見れば意外!、吾年來戀ひ慕ひし磯田妙子、思ひし程更けもせず、八年前よりは容色一入立上りて見ゆるが、莞爾やかに、されど耻かしげに坐に就きて「貴方には見忘れ給ひつらん、妾は東京須田さんにて毎日お目にかかりし磯田と申もの、かく不羨に伺ひまして」と顔色愈々赤らみ、「八年前貴君がフツツリ見え給

迷の雲

田口掬汀

はす、心に懸りて忘る、ひまもなく今日迄過しましたが、近頃伯母に勧められ保養に参り先程貴方を浴場にてお見掛け申たれば、あまりのお懐かしさに伺ひました」と猪思ふ事の半も言得ぬ様にて黙したり。吾は胸轟きて吾にも非ず悲しく嬉しく涙さへ出でなんとす。十年が間吾精神を支配せる彼戀人に面あたり逢ふさへあるに、彼方も同じ思にてありしかと思へば得もいはぬ感情、夢には非ざるか、夢ならば覺めであれかしと、彼を見詰むれば、彼は恥かしさに堪へぬと見え差し俯向きて身動きもせず。此時なりと吾は奮發一番、彼を追尾せし頃の事より此日迄の事落ちもなく物語り、猶彼が事委しく問はんとする折しも、夜やいたく更けぬらん、雞鳴一聲耳に響けば無惨……闇裏夢破れて孤燈空しく圓影を天井に印するのみ。

二週日の海水浴終り、郷里に歸りて見れば、明後日が日柄のよければ婚禮する事に極りぬと父母の君は満悦の神なり。

(完結)

釣瓶落とも云ふべき入日素早き長月中旬、暮れ行く秋の物のあはれは、夕暮叢にすだく虫の聲にも知らるるものと、小夜更けてはまた様々に、松の響き萩のさやぎなどの終夜枕に通ひて、一層の悲哀を添えて居るのに、就中、見るにつけ、聞くにつけても、腸を斷つ感のせらるゝは、病院などの有様であらう。十六夜の月、今、前庭の松の梢を掠めて、疊勝の光線を地上に落した、各室の患者大方は華胥の境に入りて、巡視醫員が蹴る草履の音廊下に重く、時偶、神經病者が夢に覺はれて擧げる悲鳴の聲の、寂寥を破つて聞えるのは、夜も、はや十一時を経過たであらう。庭園に面んだ拾八號の室のみは、洋燈の光あかくと硝子戸を洩れて、未だ談聲が聞えて居る。

傍の寢臺に熟睡せる患者を顧みて、

「お誤辭じやあムいませんが、數多の患者の中でも、お尊父ぐらゐお氣の毒なのはありやしません、只もう、非常に神經が激してますて、院長様も仰在でムいます」と若き男女の二人を覗た。

『夫れあ御厄介でムいませう。お前謝辭をお言ひよ。』

と言つて、寐臺の患者を見て、術なさ相な顔をしたのは、二十五六の婦人、中肉で色の白い、口許の締つた、黒目勝の眼差し何處やらに氣高き風姿も見ゆるに、人は夜風の寒さを絹布の衣に凌ぐ秋の夜に、洗濯の浴衣一枚肌寒げなる扮装は、由緒ある人の零落たものかとも見えて、漫ろに可憐の念がする。

『島田さん』と、曇った聲で、看護婦を呼掛けたのは、紅顏朱唇の廿二三の書生である。

『姉からも聞いて居ますが、非常に御親切にして下さるさうで、僕等は勿論、父親までの幸福です、這麼状態になつたのも畢竟あ僕が原因でおつて、心許りは火

宅の苦痛を感じて居るが、意氣地がないので、一人の父に這麼精神病まで煩はしたのです』と歎息して、こ

妻等の職務なんですもの、お謝詞なんぞ仰有ぢやあ不可ませんよ。』

『いえ、夫れあ職務にあ相違なからうけど、妻等だけ、強ひて當院に御厄介を願つたのは、餘り甘えたやうなんだけど、朋友のお前さんでも居て呉れあと、只夫れを方にしてよ。夫れもね、お金子でも澤山あつて、始終お側に侍ても居られる身分なら格別、妻と言やあ他家へ住込んで了ひ、弟も書生の身であつて見れあ、夫れも懶はず、只もう御厄介になつてる計りで、謝辭なんぞ言つた位で、御報恩が出来るもんかね』

『厭だよお喜美さん、老人じみた縛を言つてるよ。志かしね、御案じでないよ、精神病だからツて、狂人に

なツちまつたんぢやないからね、ねえお喜美さん、妾あ斯様思つてるよ。如彼に確乎した御尊父さんが、精

神が亂れるなんて、不思議で堪らないが、一軒其壓して這麼になつたんだらうね。』とあだやかに問はれて、お喜美は顔色を變へて眼を睜つたが、霎時して胸を抑へて、『どうか夫許りは聞いてお呉れでない』と顔を俯向いた。いやツ、そ、夫れは僕が話さう、姉様は事實を蔽して呉れるは難いが、僕あ不孝の罪を社會に想へて、満天下の笞で鞭撻れなけれあ良心が澄まぬ。』と佐市は眉を昂げて、看護婦に向つて軀を捻つた。

(中)

郷開の歌を謡うて故國を出たのは七年以前、そもそも當初の目的と言へば、有爲の血脉を帳場格子の中に踏み、生涯を算盤と睨較に果すが活智なく思ひ、將來は連れ一廡の學者となづて、國家の爲に貢献しやうと云ふので、不要功名心に意志跳り、すゝまぬ父上を無理に説服せ、佐市は某法學校に入學すべく上京した。人は瓢箪のぶら／＼と、霞に浮るゝ上野の花も、心なき海士の袂に、秋のあはれを宿す高輪の月も、奈落へふ悪魔と觀じて、孤燈仄暗き羈旅の窓に、必死となり

つて勉學したが、あはれや、来る年の試験に落第せしはそもそもの始め、切磋琢磨の効る其甲斐なく、鈍玉頑然として光輝を放たぬのである。

多くもあらぬ父の資産、大概是學資に費消させ許りか、商業上の失敗は、ゆくりなくも我家の樂を奪ひて、生計の煙漸次に薄らぎ行く許りなので、せめて東都へでも出たなら、生活の業務もあるだらうと云ふので、白河の家を疊み、姉を挈へ上京して、神田淡路町に一家を營んだのは去年の秋、日毎に迫る貧の苦痛と、佐市が將來を頼りなく思はれたのが病氣の基因となつて、假初の枕に就かれたが、重なる不幸にはお心も亂れさせてか、世人は邪教として忌嫌ふ天理教に歸依せられてより、病深く心念に喰入つて、這麼状態になつたのである。

僕さへ尋常に進歩が出来たら、勿論、斯る憂目は見せるのぢやないが、僕あ實に男一匹に生れた甲斐がないのだ、倦果てし浮世ながらに、すてはてし吾身ながら、今更命が惜いとは何たる因果であらう、それは、

頼りなき肉身を残して死なれもせず、徒なる空想にせめてもの成功を豫期して、憶々耻辱を忍んで居るのであるが、實に、どの面下げて社會に顔が晒されませう』と語り了つて、慌しく室内を見廻した。

『憂き目は乃て、花咲く春が來るゝて言ひますから、沮氣せずにあ勵なさい』。と看護婦は、顔をそむけて言ったが、萬更諛辭許りでもなかつたやうである。三人は暫時無言で、ひまほんを合せたものゝやうに、患者の顔を覗いた時、程近き當直室の時計は、鐘爾として十二時を打つた。此時、温かに熟睡して居た患者は、いかなる夢に魔はれたか、寐臺の上に岸破と跳起き、眸を据えて天井を白眼だ。あしきを拂うて助け玉へ天理王命。あしきを拂うて助け玉へ天理王臺」と不作法な聲で叫んで、兩手を擧げて禮拜した。喜美と佐市は、處作に困つて矗立したまゝ只鳥鳴ふだ。有撃看護婦は熟練たるもので、溫和に而かも宥め瞞すやうな口調で、

『神様があ就寝なさいつて仰在ます、お藥を召上げて

お寝ならぬけあ、御病氣が癒りません』と顔を視いて、眼に溢れて居る。無言で寝臺の側に立寄つて、静に背を摩つた。

『お父様ツ』と聲を揃へて言つたが、父は此熱誠の一言を空吹く風と耳にも入れぬか、只眼を据ゑて黙つて居る。お父様、お喜美ですよ』佐市です』と二人は更有に語氣を強めて顔を凝視したが、父は矢張きよろくである。

『え、情ないツ、僕等の面影は、未來永劫父上の意心から奪去られたツ』と佐市は空を仰いて、木偶の如き立壁んだが、お喜美は父の手を取つて涙をはら／＼と落した。患者は眼を光らして三人の顔を見廻して居たが、突然聲を放つて咲笑した。『はツは／＼病氣がどうしたからツて藥なんぞ要るもんか、元來人間は、九億九千九十九萬九千九百九十九疋の縮でな、必ず百拾歳まで生延ると保證だが、病と云つて心の中には八つの汚き塵がある、神様を祈つて那様心を除却

ちまぶと癒りまするでな、あしきを拂うて助け玉へ天理王命』と云つて、極めて穩かに、自身で寝臺の上に軀を横へた。姉弟はつか／＼寝臺の側に近寄つたが、情なや、父は、はや前後も知らぬ鼾聲。

『可、按排にお寝なすつたし、夫れにもう十二時も経過しますし、他室へ障ツちやあ不可ませんから、お二人さんもお寝なすつたら可ムんせう』と看護婦は言つた、姉弟は終夜枕頭に待きて、胸に纏るゝ悲痛の感を、切めては憂き物語に語り明かさんものと思ふのであるが、他人の熟睡の邪魔するにも忍びぬので、言はるゝまゝに室内に臥つた。

瞞眞ツても生憎心は冴え、未來の空想幻に描かれて眼前に散つき、身は宛然、際涯なき大沙漠に逍遙ひ歩き、何處の方にか温湯たる水音聞えて居ながら、それを探り得ずに悶ゆるので、渴は益々激しく、咽喉は熱火に燒かるゝ苦痛を感じるので、天に向つて一滴の水を哀叫するやうな思であるが、此可憐な二人の涙を、神は温き慈悲ある御手で拂うて呉れぬであらうか。

(下)

『眠つた心ぢやなかつたが、何時拔出しか一向分らないです。

『何しろ十分たあ経過ますまい、妻が當直室まで行つて来る間の事ですからね。』

『二人顔を揃へ居ながら、患者の拔出るも知らないなんて、まあ何と云ふ頃間だらう』

『談話はまあ後にし、尋ねなくちやあ不可ませんよ。看護婦に勵まされて、姉弟は屹ど心を取直し、帶引メに晴れもやらで、浮世をへだてのませ垣に、己が影にして見たが見中らぬので、三人は無言で歩を躊躇した。但見れば往來を仕切つた煉瓦塀の、建換工事のため取

毀した隙間から、人の出たやうな氣勢があるので、三人は均しく眼を見交した。無言で點首合つて往來に出

るど、程近き公園の森の中で、人の呻吟く聲がするので、スターと許りに胸跳らして、聲を知邊に足を早めた。鬱鬱たる公園の森、長へに人の世の秘密を裏んで居るかの如く、寂然として沈黙を守つて居る、乃て聲ある方に到着いたが、ある木の根に蹲踞で居る黒法師がある。

『お父様だッ』と先に立つた佐市は絶叫した。

お喜美は『えッ』と許りに走寄つて、父の膝に縋附いて、『お父様餘りぢやムいませんか』と泣仆れた。

『可、鹽梅に見當りましたが、餘り意志を刺激させちやあ不可ません、兎も角、早ふ連れて還るが専一です』

看護婦は、沈着な口調で、窘めるやうに言つた。

黒法師はスツクと立上つて『佐市ッ、お、お喜美ッ』と言つた。其聲が意外に確然たる音調なので、姉弟は夢のやうな、また、稍呆れたやうな感で、『はい』と一齊に無意識な答をして父の顔を凝視した。

梢漏る月光を浴びた父の顔は、現世の人とも思はれぬ凄味がある、眼は四みて異しく輝やき、頬内落ち頬骨ろしを吹消すとが不能であらうか。

(完)

女 按 摩

大 迫 楓 山

(上)

世間は皆寝静まつて、到る處寝息の音と、鼠の暴れ廻る音のみで、月は西山の山の端に沈んで、其光も淡く、餘光を餘して居る、處々に吠へる、犬の遠吠も、一時であつて、亦元の寂寞に戻つて仕舞ふ、正方形で正面に赤く蠟燭の畫と、其中に商標を、上にして絲真としてある、行燈の火が、微風に連れて、消へ掛かつたり、明るくなつたりして、荒物屋である事を、道行く人に、案内するかの如くである、人通の少ない夜更けに、何處の町を、流して來るのか、音も絶へば笛を吹いて、此方に來掛かる、十六七の女按摩があ

た

『へい? 何方様ですか!』

『按摩様……此家ですよ!』

『左様で御座りましたか?』

と云つて、外なる女按摩は、暫く立ち止つて、考へる様子で、兩脇を見廻はした、笛を吹いて、立ち去ろうとした時、くじりを開けて、青白い顔が内より現はれ

『按摩様を連れて、参りました?』

五分心のランプを、前に煙草盆を片脇に置いて、右手に銀煙草を廻轉させながら、無中になつて荒木又右衛

凸出したる面影。憔悴て枯木のやうな両手を揚げて、大空を仰いで禮拜した。

『學者も智者も神様のお冥助だ、佐市、天理王命を信心しな、なあ十柱の神様がお應護を添えて下さつて、確然と學者にして下さる。難有い。萬代の此世一�헤

つ見渡せば、胸の分りたものはない、その筈じや説いて聽かせたものはない、知らぬは無理ではないわいな』呂律可笑く神樂歌を奏して、足拍子とつて踊り狂ふ。『情ないなあ』と佐市は空を仰いて太息した。

『夜露に冷へちやあ不可ません、まあお連れ申して還らうぢやありませんか、ね、お喜美さん還りませうよ』看護婦に勵まされて、姉弟はたゞ暗涙を呑んで立上つた。

小休なく叫び狂ふ父を劬りながら、夢の感で森を出た。眼下に見ゆる幾萬の人家夜露に眠りて、一朧煙の如く腋脣となつて居る。空には幾片のむら雲立ちて、一朧きりの夜風稍に叫べば、ばらくと滴る露膚に浸込む